



楓の誓

R6.2.27(第11号)
文責: 瀨上 佳宏

稚心を去り、己を啓く

閏年の二月も明後日までで、三年生は、卒業式まであと八日。一・二年生も、本年度の授業日があと十七日となりました。

さて、開校三周年の節目にあたり、標記の文言のとおり、合志楓の森中学校の校訓を定めました。その策定過程としましては、令和四年度の第二回学校運営協議会において、委員の皆様からいただいた意見をベースに、本校の教職員及び市教育長はじめ学校関係の皆様からの意見も参考にし、校訓案を作成しました。そして、本年度の第一回学校運営協議会において、委員の皆様以案を承認いただき、本校の校訓として決定しました。

まず、前半の「稚心を去り」は、幕末の思想家、橋本左内の「啓発録」における第一訓「稚心を去る」からの引用です。「稚心」とは、子どもっぽい心のことであり、啓発録では何より先に、親への依存心や子どもっぽい考えと決別することの必要性を説いています。この考えは、開校以来の学校教育目標とした「夢と誇りを持ち、自分らしく主体的に行動できる生徒」となるための大前提とも言えます。

また、本校では、開校以来、第二学年の行事である「立志式」において、この「啓発録」を端緒に、自分の進路や生き方と向き合う活動に取り組んできました。開校期の生徒たち(現高一〜現中一)は、ICTの活用や学力向上の

取組、ハンセン病問題を一つの柱とした人権学習をはじめ、様々な教育活動の場面で、「楓の誇り」を胸に大活躍し、数多の実績を残してきました。黎明期の合志楓の森中学校の輝かしい歴史・伝統を継承する上でも、立志式に関連する文言を取り入れたいと考えました。

さらに、「稚心を去る」は、小中一体型校舎で小学生(年少者)とともに学校生活を送る中学生が、年長者として持つべき心得と言えます。まさしく新設校設立に当たつての合志市のコンセプトにも通じるものです。

後半の「己を啓く」は、自分がまだ気付いていない未知の次元、あるいはまだ到達していないより高度な次元に自らを導くことを意味しています。自分とその未来を変えることができるのは、自分自身です。「己を啓く」の文から、生徒たちに夢の実現に向け挑戦していくイメージを膨らませたいと考えました。

また、本校は旧菊池医療刑務支所の跡地に建設され、菊池恵楓園に隣接しています。ハンセン病問題の啓発に貢献すべく、ハンセン病問題を一つの柱に取り組んでいる人権教育の先進校として、「啓」の文字を取り入れ、「ひらく」と読むことにしました。

さらに、開校期の熊本は、TSMCの進出に象徴されるように、グローバル化進展の真只中にあります。「Society 5.0」と呼ばれる予測困難な未来社会を生き抜く子どもたちに必要な「国際的視野」という視点にも、「己を啓く」は通じるものと考えています。

なお、本年度の第二回学校運営協議会において、合志楓の森小学校の校訓も併せて策定されました。「志高く、道を拓く(こころざしたかく、みちをひらく)」です。どちらにも「ひらく」という読みの語句があることなど、小中の関連性・連続性が意識されています。

熊本県学力・学習状況調査の結果を振り返る

一月末に、熊本県学力・学習状況調査(以下、「県学調」)の結果が公表されました。学校には、教育活動の成果を説明する責任があります。過度に競争を煽ることを防ぐため、申し合わせにより、数値で平均正答率をお示しできません。そこで今回の県学調の結果を「概要」でお知らせします。

まず一年生は、全国・県平均(正答率)を「少し」または「かなり」上回ることでました。同集団の経年比較でも、標準スコア(偏差値)で、国語が1.8ポイント(以下「P」)、数学(算数)が1.1P伸びており、高い教育効果を発揮できたものと評価できます。まだ伸び代がある分、今後が楽しみな学年です。

次に二年生は、全国・県平均を「非常に大きく」上回ることができました。また、標準スコアの経年比較でも、さらに数学が1.9P、英語が0.4P伸ばしています(国語は、昨年度の結果が非常に高かったため、若干下がっています。数学とほぼ同じスコアです)。二年生は、「学力が高い」とされていた初代卒業生(現高一)の結果をもはるかに超える、極めて良好な結果だったと言えます。

また、「I-check(質問紙調査)」の結果からも、全体的に学校は落ち着いており、各学級の支持的風土が育っていることを推察できます。ただし、一年生のポイントが、全体的に四月より低下していました。欠席者がとても少なく、何事にも意欲的な一年生の様子からは、意外な結果だったので、中学生としての自覚が生まれ、「メタ認知能力」が高まってきているのかもしれないと思います。今後の状況を見守っていききたいと思います。



学校HPの
QRコード